



「天気予報のための 局地気象のみかた」

中田隆一著

東京堂出版, 2001年8月, 113頁,
3,800円(本体価格), A4E判,
ISBN: 4-490-20438-8

「局地気象に食らい付いて真髄までしゃぶる」, そんな感じのする本である。気象の分野ではこのようなタイプの本が少ないから、この本を読むとちょっと驚く。もともと局地気象に関する書物が少ない中で、その局地気象を題材にしたという点でも注目されるが、それよりもこの本の特色は、体験的・実証的な記述にある。自分でチャーターした飛行機による机上観測や、自作のモーターボートによる海上観測、盆地での係留気球を使用した霧の夜間観測など、現象に肉迫した実体験のデータに基づく現象の記述には説得力がある。

そこで、多くの読者は、この本の著者はどんな人物だろう、と興味を抱くに違いない。著者中田隆一氏は気象庁の職員で、現在は広島航空測候所長の職にあるが、瀬戸内海沿岸の気象官署で業務に従事するかたわら身近な局地気象の解明に取り組み、昭和60年度日本気象学会奨励金を授与された人物である。その選定において、愛媛県の「肱川あらし」や瀬戸内海の「陸風収束雲」についての観測的研究が高く評価されたが、今回出版されたこの本では、そのようにして積み重ねた実証的な研究成果が随所に織り込まれ、現象に関する記述を豊かに肉付けしている。

この本は9つの章で構成されている。第1章は局地気象の解析に必要な基礎知識の解説であり、第2章以下で個別的な現象の解説が繰り返されられている。全体の章立ては次のようになっている。

1. 局地的な気象の解析
2. 風
3. 記録的な気温と湿度
4. 雨・雪
5. 肱川あらし
6. 霧
7. 局地不連続線と大気汚染
8. 北東気流
9. 酸性降下物

第2章「風」では、海陸風、島や山岳を迂回する風、山越え気流、山岳波、竜巻・ダウンバースト、台風と

© 2002 日本気象学会

局地的強風といった諸現象が扱われている。中でも、著者自身による松山や広島での海陸風の観測事例と陸風収束雲の発見に関する記述は読みごたえがある。

第3章「記録的な気温と湿度」では、日本で記録的な高・低温や低湿が観測される場合のメカニズムを現象論的に説明している。

第4章「雨・雪」で扱われているのは、集中豪雨と南岸低気圧による太平洋側の雪である。1998年に日本各地で発生した4つの豪雨について、概念図を示しながら解説を試みている。また、関東地方の降雪について、話を低気圧経路と降雪の関係に限定することなく、局地気象予報の観点での着目点を示している。

著者の数ある研究対象の中でひととき重要な位置を占めたと思われる「肱川あらし」については、第5章として単独の章が割り当てられている。ここでの著者自身の観測記録に基づく現象の記述は圧巻である。著者は肱川あらしを「気象学の縮小版」と呼び、気象学の多くの示唆に富む現象としてこれを紹介している。

第6章「霧」では、瀬戸内海の霧と中国山地の霧が紹介されている。ここでも観測事例を基に模式図を用いた解説が読者をひきつける。

第7章以下の3つの章で扱われている局地不連続線、北東気流、大気汚染といった内容は、関東平野に現れる現象に関する記述が主体になっている。アメダス実況図やエマグラムなどを駆使し、現象の実体を分かりやすく解説している。

このように、著者の観測体験を織り交ぜ、図をふんだんに用いた解説こそ本書の持ち味と言えるのだが、気象学的な厳密さを期待する向きにはやや物足りないかもしれない。しかしながら、局地現象の真つ只中に身を置いて現象を肌で感じ、入手しうるあらゆるデータを収集してとことんまで追及した結果の集大成としての本書には、机上あるいは計算機の世界だけで組み立てた学術書にはない魅力がある。

最後に若干苦言を述べるとすれば、書名にある「天気予報のための」という観点からの記述が、第4章と第8章にわずかに見られる以外は乏しいように思われた。また、第7章に「7-3 沿岸前線」という節を設けているのだが、直前の7-1節で紹介している代表的な局地不連続線はどれも沿岸前線であるように思われ、読者を戸惑わせるのではないかと心配になった。

なお、本書のもう1つの特徴を付記すると、本書は珍しくA4E判の横長形であるが、なぜか縦長のケースに入っている。(札幌管区気象台 永沢義嗣)